The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカにおける「脱トラッキング(detracking)」についての研究動向 : 1990年代後半以降の政策的論争と研究を中心に
Author(s)	小西, 尚之
Citation	大阪大学教育学年報. 2009, 14, p. 77-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12297
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アメリカにおける「脱トラッキング（detracking）」についての研究動向
—1990年代後半以降の政策的論争と研究を中心に—

小　西　尚　之

【要旨】

本稿の目的は、日本の総合学科高校のモデルとも言えるアメリカの総合制高校における「脱トラッキング（detracking）」の研究動向を探ることで、日本の高校生の進路選択を考える際の参考とすることである。そのために、まずアメリカのトラッキングに関する研究の大まかな傾向を見る。さらに「脱トラッキング」に関する政策的論争を紹介し、トラッキングを維持するにしても、あるいは逆にトラッキングを廃止するにしても、十分な理論的根拠を示していないことを確認する。そして「脱トラッキング」に関する先行研究を取り上げ、「公式の」トラッキングを廃止したはずの学校においても「非公式の」トラッキングが残存し、生徒の科目選択や進路選択に影響を与えていることを示す。最後にこれらの論争および先行研究の検討の結果から、日本の総合学科高校や進路選択の研究に対する若干の示唆を与える。

はじめに

本稿では、アメリカにおけるトラッキング研究の新しい動向である「脱トラッキング（detracking）」についての諸議論を整理し、今後の日本の高校研究への示唆を得ることを目的としている。

「トラッキング（tracking）」とは「たとえば複線型学校システムのように法制的に生徒の進路を限定するということはないにしても、実質的にはどのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定されること」（藤田　1980, 118頁）を指す。アメリカ教育省の全国教育統計センター（NCES）が1993年に全米の公立中等学校の代表サンプル912校を対象に行った調査によれば、86％の学校が必修科目において差別化したコースを提供しているという。ところが、自分たちの学校が伝統的なトラッキング制度を維持していると答えた学校はたった15％であり、71％の学校が差別化したコースを提供しているものの生徒はコースを自由に選択できるとしている。さらに57％の学校が過去5年間で差別化したカリキュラムを修正しており、49％が今後の修正を検討中だと報告している（NCES 1994, p. 5）。NCESの調査が示すように、実際にはほとんどのアメリカの中等学校において、多様化した生徒を選別する機能としてトラッキングが導入されている。ルービン（Rubin 2003）によれば、トラッキングは教育機会の不平等をもたらすものとして長く問題視されてきており、学校内での不平等を改善する政策的手段として「脱トラッキング」の動きが広まった。しかし、「公式の」トラッキング制度を廃止した学校においても多くの場合、「非公式の」トラッキングが存在している。つまり形式的には自由に科目を選択できるが、結果的に生徒の人種的・社会経済的なグループ分けが生じてしまう状況である（Heck, Price, and Thomas 2004, Rubin 2003）。

このようにアメリカの総合制高校における「脱トラッキング」は形式的な選択の幅を広げるが、日本の高校改革の方向性もこれと同じような状況ではないのか。例えば日本の「高校教育改革のパイオニア」と言われる総合学科高校においては、「自由な」科目選択制度を「売り」にしている学校が多い。伝統的なトラッキングが廃止されたアメリカの学校において生徒の科目選択や進路選択はどのように行われているのだろうか。そのような視点でアメリカの「脱トラッキング」の研究を検討し、日本の高校生の進路選択を考える際の参考としたい。日本の高校においては、普通科と専門学科との間の偏差値による「学校間格差」が長く問題とされてきた。しかし単一の学校内でも成績などによって「学校内格差」が存在する。このように日本の高校制度は「二重のトラッキングシステム」（岩木他編　1983, 8頁）という特徴的な構造を持っている。1990年代以降増加している、単位制や総合学科など「新しいタイプの高校」においては、多様

な進路希望を持つ生徒たちのために多様なカリキュラムが用意されている。そこでは普通科や職業学科に比べ、学校内部におけるトラッキング、つまり「学校内格差」が顕著に見られることが予想される。したがって、アメリカの総合制高校における「脱トラッキング」の研究は、日本の総合学科高校や総合制高校における科目選択や進路選択を考察する際に、有効な枠組みを与えてくれるものと考えられる。

以下では、まず第1節で「脱トラッキング」の議論の前提としてこれまでの代表的な「トラッキング」研究の流れを整理する。次に第2節では、1990年代半ばにアメリカの雑誌で行われた「脱トラッキング」をめぐる2つの政策的な論争を取り上げる。最後に第3節では、主に1990年代後半以降の「脱トラッキング」の研究について、「公式の」トラッキングと「非公式の」トラッキングの違いに注目して整理することにしたい。

1.「トラッキング」研究の概観

この節では「脱トラッキング（detracking）」の研究の前に、まず「トラッキング（tracking）」そのものについてアメリカではどのような視点から研究されてきたか、大まかな流れを押さえることにしたい。ここでは膨大なアメリカのトラッキング研究のすべてを網羅することはできないので、これまでにトラッキングがどのような視点や方法で研究されてきたかという観点から、一部の代表的な研究のエッセンスのみを紹介することにする。スレイビン（Slavin 1995）によると、アメリカにおける「能力別学級編成（ability grouping）」の効果に関する研究の歴史は長く、19世紀の初めから行われており、現在もなお盛んであるという。また、ローゼンバウム（Rosenbaum 1996）によれば、「トラッキング（tracking）」の社会学的研究は50年以上の歴史を持つという。

1960年代から1970年代にかけての初期の「トラッキング」研究は、主に学校内の「不平等」の観点からトラッキングが生徒の進路選択などに与える影響に注目していた。学校という官僚的組織の中で生徒の進路に影響を与えるカウンセラーの役割に焦点を当てた研究にシコレルとキツセ（Cicourel and Kitsuse 1963）がある。シコレルとキツセは、大規模な総合制高校における、生徒・親・カウンセラーに対する面接調査から、カウンセラーが生徒の社会的背景や家庭的期待などの影響を受けながら生徒の進路指導を行っている姿を描いた。トラッキングを評価する際の指標としてはソレンセン（Sorensen 1970）の基準が有名である。ソレンセンによれば、生徒の組織分化は次の4つの特徴（dimensions）を持つ。①「包括性（inclusiveness）」：多くの生徒をより高い教育レベルに導く度合。②「選択性（electiveness）」：生徒の選択が果たす役割の度合。③「選抜性（selectiveness）」：教育当局が学習の観点から意図的に作りだした同質性の量。④「範囲（scope）」：一定の生徒が長期にわたって同じ教室のメンバーである度合。このソレンセンによる4つの特徴はローゼンバウム（Rosenbaum 1976）など以後のトラッキング研究に大きな影響を与えた。ローゼンバウム（Rosenbaum 1976）はソレンセンの4つの特徴は実際のトラッキングシステムには適用できないとした。コールマン他（Coleman et al. 1966）とジェンクス他（Jencks et al. 1972）の先行研究から彼は「教育的選別の重大な影響の多くは学校内で起こっている」（Rosenbaum 1976, p. 3）とし、「学校間」ではなく「学校内」の選別システムが不平等を生んでいることを指摘した。そこで彼は調査対象校において、学校の記録文書を利用しながら、生徒に対する質問紙調査と面接調査を実施した。

このような初期の研究の影響を受けながらも、1980年代に入ると徐々にトラッキングが形成される過程そのものに研究者の関心が移ってきている。トラッキングのインプット（入口）やアウトプット（出口）ではなく、スループット（過程）そのものが注目されてきたのである。アメリカの総合制高校におけるエスノグラフィーによって、トラッキングが形成される要因を教師の活動に焦点を当てて明らかにしたものにフィンリー（Finly 1984）の研究がある。フィンリーは複数の英語教員に対する面接調査を行った。そして高トラックを担当する教員は有用感を感じ、低トラックの担当者は報われない気持ちを感じていることを指摘し、教師の意識や教師間の関係などからトラッキングが強化されていく過程を描いた。一方、ガモラン（Gamoran 1989）はカリキュラムの分化に注目し、学校内の階層化とその影響、そして両者をつなぐメカニズムを測定するために、量的な社会学的アプローチを主張した。さらにおよそ20年に渡る広範囲のトラッキングの研究にもかかわらず、トラッキングと学業成績との関係は未解決のままであり、トラッキ

ングが生徒の業績に影響を与えるメカニズムはいまだに実証されていないとした。また、スペード他(Spade, Columba, and Vanfossen 1997）は生徒にコースが提供される過程に注目した。スペードらによれば、初期の研究は「トラッキングが生徒に与える影響」に注目していたが、「学校という組織構造の中でどのようにトラッキングが作られているのか」ということの検証に注目が移ってきている（Spade, Columba, and Vanfossen 1997, p.108)。

以上で見てきたことからアメリカのトラッキング研究の流れを整理すると、初期の研究は学校内の「不平等」の観点からトラッキングが生徒の進路選択などに与える影響に注目していたが、徐々にトラッキングが形成される過程そのものが研究対象となってきた、とまとめることができるだろう。

2.「脱トラッキング」をめぐる政策的論争

前節ではこれまでの「トラッキング」研究の大まかな傾向を確認したが、「トラッキング」とその廃止である「脱トラッキング」は政策的論争のテーマにもなっており、いくつかの雑誌で特集されている。その背景には、「公平性（equity）」と「効率性（efficiency）」のバランスの問題がある（Brewer, Rees, and Argys 1995, 1996)。つまり学校におけるトラッキングを教育機会の不平等だとする考え方と、学校のトラッキングを社会に効率的に人材を輩出する配分装置として維持する考え方の対立である。トラッキングの廃止を求める親などが裁判を起こすケースも出てきているようである（Welner and Oakes 1996)。

この節ではまず(1)1994年に“Sociology of Education”誌上で行われたハリナンとオークスの論争を取り上げ、次に(2)1995年から1996年にかけて“Phi Delta Kappan”誌に掲載された「脱トラッキング」に関する論争を紹介する。この2つの論争から、特に1990年代に入ってトラッキングのどのような点が批判されその廃止が訴えられているのかを確認することがこの節の目的である。

(1)“Sociology of Education（1994)”におけるハリナンとオークスの論争

最初に紹介するのは、1994年に“Sociology of Education”誌上で「論争（EXCHANGE）」として取り上げられた、ハリナンとオークスの論文である。2人のトラッキングについてのスタンスは対照的なものである。まずハリナン（Hallinan 1994a）によれば、中等学校は生徒を上位のトラックに配置する際は客観的な基準を、下位のトラックに配置する際は恣意的な基準（あるいは主観的な基準）を使っているようだ。このようにハリナンはトラッキングには問題点があるとしながらも、トラッキングを廃止するよりは、十分な手当をしてトラッキングを改善していくことの方が重要だとする。さらに理想的とは言えない状況でトラッキングを廃止することは、原則に基づかないトラッキングを実践することと同じくらい不十分な結果になるだろうと指摘する。

このハリナンの論文に反応したのがオークス（Oakes 1994a）である。ハリナンと対照的に、トラッキングは「文化的・政治的な文脈に埋め込まれており、善意や悪意・人間の混乱した決定で溢れている」(Oakes 1994a, p.85）とオークスは批判した。さらにトラッキングを規範的（normative）・政治的（political）な側面と離れて理解するのは適切ではないとする。学校内では、生徒の人種や社会階級が教育者によるクラス配置の決定に最適な基準を与えている。ハリナンがトラッキングの不平等ばかりを問題にしている点を指摘し、トラッキングの不平等はトラッキング自体が持つ規範的・政治的な外観に過ぎないとオークスは考える。異種性こそが、低地位の生徒を質の高いカリキュラムや教師・学習経験にアクセスさせるために必要な手段であるとし、「脱トラッキング（detracking)」の必要性を強く主張している。

さらにこのオークスの反論に応えた論文がハリナン（Hallinan 1994b）である。意味のある議論をするために「トラッキング（tracking）」と「脱トラッキング（detracking）」という言葉を定義する必要があると彼女は主張する。「トラッキング」すなわち「同質のグループ分け（homogeneous grouping）」は「生徒の能力や学業成績に基づいて教授のために生徒を組織すること」であり、「脱トラッキング」すなわち「異種のグループ分け（heterogeneous grouping）」は「生徒を教授のために広い範囲の能力を含んだ集団に配置すること」（Hallinan 1994b, p.89）であるとした。

これにもさらにオークスが応えている（Oakes 1994b）。トラッキングは能力の問題だけではなく、ある部分は人種に関する問題でもあると彼女は考える。アフリカ系アメリカ人やラテン系の子どもたちが不釣合いにより低いトラックに配置されているにもかかわらず、トラッキングによって不利益を被っている子どもの大部分は貧しい労働者階級の白人である。トラッキングのメカニズムは少なくても表面上は能力である。しかしトラッキングは人種差別のように、貧しい労働者階級の白人を低く評価し不利な立場におくような不平等を学校に持ち込むとしている。

(2) "Phi Delta Kappan（1995－1996）" における「脱トラッキング」の論争

次に紹介するのは、1995年から1996年にかけて "Phi Delta Kappan" 誌に掲載された「脱トラッキング」に関する論争である。ブルーアー他（Brewer, Rees, and Argys 1995）は「脱トラッキング」が持つ負の側面を全国データから示し、「脱トラッキング」の取り組みは必然的に犠牲を伴うものであり、勝者と敗者を生むことになると主張する。つまり低トラックの生徒が異種（混合）クラスで良い成績を修めたとしてもそれは高トラックの生徒が犠牲になっている結果だというのだ。生徒のトラッキングをすべて廃止した場合、数学のテストの平均得点が1.7%下がることになるとブルーアーらは推定している。分析結果から、トラッキングは生徒の学業成績に対して決定的な影響を与えていることを指摘した。さらにトラッキングは「効率性（efficiency）」の面で有益であるが、「公平性（equity）」の問題をも提起しているとした。トラッキングは明らかに低トラックと高トラックの生徒の間の成績の差を広げる。一方、「脱トラッキング」は公平性の面では有効であるが、その結果として主に高トラックにいる生徒のテスト得点を下げることになる。このように政策立案者は難しい選択を迫られていると指摘する。

このブルーアーらの論文に対して何人かの専門家が批判的な意見を述べている。まずギャラガー（Gallagher 1995）はブルーアーらの指摘は正しいとしながらも、本当の政策的な課題は「優秀性（excellence）」と「公平性（equity）」であると主張する。問題は生徒たちが、過去の成績や現在の適性・職業的関心にかかわらず、中等教育において理想的なカリキュラム経験を享受しているかということであるとする。ここで言う公平性とは、適性や過去の成績にかかわらずすべての生徒に同じ教材を与えることではなく、一人一人の生徒が最も必要としているものを与えることであるとしている。

次にイェーガーとハッティー（Jaeger and Hattie 1995）は、ブルーアーらの論文に対して次の３つの疑問を示した。すなわち、①分析の解釈は保証されるのか、②分析の結果は先行研究と矛盾しないのか、③政策的観点から研究の成果をどう生かすのか、である。そして能力別学級編成の影響は小さく、むしろ教室内の教師による教授法の革新の影響の方がはるかに大きいと主張している。

スレイビン（Slavin 1995）もブルーアーらの結論に懐疑的である。スレイビンはまず、トラッキングに関しては２つの異なるタイプの研究が存在するとしている。すなわち、①「高トラック」と「低トラック」の比較、②「トラック」と「トラックなし」の比較、である。２つのタイプの研究成果によれば、能力別学級編成には効果がないということでは一致しているが、高トラックと低トラックには著しく異なった効果があるかということに関しては一致していない。能力別学級編成が有益であるとは断言できないが、「脱トラッキング」の計画が実際にうまくいくかどうかの結論もまだ出ていないとする。結局ブルーアーらの提示したデータは、能力別学級編成を維持するだけの説得力のある理由をほとんど提示していないとしている。

ブルーアーらの研究に直接言及してはいないが、「脱トラッキング」をはっきりと支持しているのがスミスーマドックスとウェロック（Smith-Maddox and Wheelock 1995）である。スミスーマドックスらは、トラッキング廃止のためには生徒側の願望と学校側の期待のギャップを埋める必要があり、次の３つの原則が「脱トラッキング」の取り組みを成功に導くとした。すなわち、①学校は生徒グループがお互いに孤立するのを避ける、②学校は生徒に価値のある知識に触れさせる、③学校はすべての生徒に高い期待を示す、である。トラックのある学校ではカウンセラーが「門番（gatekeeper）」の役割を果たし生徒の機会を制限することもあるが、トラックのない学校ではカウンセラーは生徒の成功を助ける重要な役割を果たすことになると指摘している。

これらの批判に対して、ブルーアー他(Brewer, Rees, and Argys 1996)は翌年出版された同誌で応えた。特にギャラガーによる「トラッキングよりもカリキュラムが重要だ」という指摘については、実際にはカリキュラムとトラッキングの両方の影響は切り離して考えることはできないとしている。そして「脱トラッキング」に賛成も反対もしていないことを強調し、トラッキングを廃止するかどうかは我々の社会が「公平性（equity）」と「効率性（efficiency）」という矛盾した考え方のどちらを重視するかにかかっているとした。最後にトラッキング廃止の改革には犠牲が伴うことを再び強調している。

以上で見てきたように、トラッキングを支持する意見では、トラッキングが様々な問題を抱えながらも、学業成績などの面で効果があり効率的であることが主張されている。一方、「脱トラッキング」を主張する側は、トラッキングは人種などの不平等が反映され公平性の面で問題があるという立場であった。日本の教育改革を考える際にも、ここで提起されている「効率性」と「公平性」のバランスをいかに取るかという課題は重要な視点となるであろう。

3.「脱トラッキング」についての研究動向

前節ではトラッキングの維持と廃止に関して、特に1990年代に入って政策的な論争が展開されていることを見た。そのような社会的状況を反映してか、第1節で見たトラッキング研究の傾向にも近年、特徴的な変化を見ることができる。1990年代後半以降のトラッキング研究の特徴として、「脱トラッキング」についての研究が多く見られることが挙げられる。そこでこの節ではまず(1)ウェルズとオークスを中心とした研究グループが「脱トラッキング」に取り組む中等学校10校で行った大規模なケース・スタディを紹介する。そして次に(2)「公式の」トラッキングと「非公式の」トラッキングという観点から、「脱トラッキング」の研究動向を整理する。「公式の」トラッキングが廃止された学校において、生徒の科目選択や進路選択はどのように変わったのかを検証することが本節の課題となる。

(1)「脱トラッキング」の中等学校10校におけるケース・スタディ

ウェルズとオークスを共同研究代表者とする研究グループは、人種的・社会経済的に混合した中等学校10校（ハイスクール6校・ミドルスクール4校）において3年間に渡って「脱トラッキング」のケース・スタディを行った。研究課題は、「人種的に混合した中等学校において、権力を持つ人が能力別グループやトラッキングの縮小を決めた時に何が起こるか」（Wells and Oakes 1996, p.138）というものである。研究チームは、「脱トラッキング」に取り組み、かつ調査協力の申し出があった中等学校10校を選び2年間で3回、各学校を訪問しデータ収集を行った。データには、学校管理者や教師・生徒・親・地域のリーダー・教育委員会のメンバーに対する詳細な半構造化インタビューの記録もあり、すべての学校の合計で423人にインタビューを行った。また授業観察とともに、職員やPTA・教育委員会の会議の観察も行われた。調査は1992年の春から1995年の春まで実施され、「脱トラッキング」の技術的側面を検証するために質的方法が用いられている。このウェルズとオークスを共同研究代表者とする10校の大規模なケース・スタディの結果から複数の論文が発表されている（Oakes, Wells, Jones, and Datnow 1997, Wells and Oakes 1996, Wells and Serna 1996, Yonezawa, Wells, and Serna 2002など）。以下にそのうちのいくつかの概要を紹介する。

まずウェルズとオークス（Wells and Oakes 1996）は調査から2つの中心的な課題が浮かび上がったとしている。すなわち、①「差別化に対する親の要求」と②「階層化された高等教育制度」である。①「差別化に対する親の要求」とは例えば、高トラックの子どもを持つ親が他の生徒との差別化を求める場合などである。このような要求は主に地方の学校において権威を持ち、政治的に権力のある親からもたらされる。それはほとんどの場合、白人で自分自身の教育程度が高い親である。教師は、実力者の親を喜ばせるとともに、トラックの数を減らし、皆を制度の上位に置いて低学力の生徒に質の高いカリキュラムへのアクセスを提供しなければならない。一方、②「階層化された高等教育制度」は、高等教育が高校に対し、多様なコースを差別化し、最終的に生徒をそれらのコースで差別化することを強制していることである。つまり大学は、学校ランクやクラスのランクなど、入学志願者に関してできるだけ差別化された高校の資

格認定を必要としているということである。

次にウェルズとセルナ（Wells and Serna 1996）は、「脱トラッキング」の改革に取り組む学校の努力に内在する、政治的葛藤の特性を明らかにしようとした。この論文では、学校外の権力がどのように「脱トラッキング」の改革を実施しようとする教育者に影響を与えるか、ということに焦点が当てられ、特に「地域のエリート」と呼ばれる、経済的・政治的・文化的資本を合わせ持ち、校区内で高く評価されている人たちに注目している。これらのエリートたちは、自分の子どもたちが従来のトラッキングシステムにおいて特権的な立場を享受しているので、「脱トラッキング」に対して最も強く抵抗する。このような状況において、各学校で見られる政治的葛藤について詳述している。

同じようにオークス他（Oakes, Wells, Jones, and Datnow 1997）によれば、「脱トラッキング」の改革は、知識や能力の意味をめぐるイデオロギー的な葛藤において、権力や管理・正当性の基本的な問題に直面するという。例えば「脱トラッキング」に抵抗する教師の存在がある。知識は生徒の学校生活や将来の生活に欠かせないものなので、すべての生徒が利益を得るような、多様な生徒が集まる学習環境をつくることはできないというのが彼らの信念である。また、地域の有力な親による「脱トラッキング」への抵抗もある。その際に中心的な役割を果たしているのが人種である。抵抗する親を「教育する」ことこそが「脱トラッキング」に伴う唯一の厄介な問題だと多くの教師は信じている。

さらにヨネザワ他（Yonezawa, Wells, and Serna 2002）は、不平等を再生産する装置としてのトラッキングを廃止しようとする運動が様々な理由から成功していないことを示した。ヨネザワらによれば、1990年代の初めに全米中の教育者たちは、トラッキングや能力別学級編成に代わるものとして「脱トラッキング」を開始した。これらの努力に対する支持は州の教育当局やNPOから得られた。政策立案者も、進歩的であれ保守的であれ、「脱トラッキング」をより高い基準を求める努力として支持した。しかし、これらの幅広い支持にもかかわらず、「脱トラッキング」を試みた教育者と政策立案者は、様々な社会的・政治的・文化的な理由から、トラック構造を廃止することは非常に難しいことだと認識した。研究を行ったすべての学校において、コース配置の際の「選択の自由（freedom of choice）」は、評判は良いものの、成功はしていなかった。つまり「選択の自由」は、トラック構造を廃止しようとする教育者たちではなく、高トラックのコースを選択する生徒たちに改革の責任を押し付けようとしたのである。「脱トラッキング」は低トラックの生徒に対して、もし彼らが選択すればより高いトラックに登録することを許可することで、トラッキングの「過程」における障害を排除した。しかしながら、低・中・高トラックの「構造的」・「文化的」側面が継続したために、選択は失敗に終わったとしている。

このように、ウェルズとオークスを中心とした一連の大規模なケース・スタディの結果は、全国的に広がったかのように見える「脱トラッキング」の運動が、様々な政治的・社会的・文化的な理由から必ずしも成功していないことを示した。

(2)「公式の」トラッキングと「非公式の」トラッキング

学校が作った基準によって生徒をコース分けすることが「公式の」トラッキングだとすれば、「脱トラッキング」によって制度的には学校や教師による配置をなくし生徒の選択によってコースが決まる状態であるが、結果的に社会的・文化的なグループ分けができてしまう状態が「非公式の」トラッキングである。ここでは、このように「脱トラッキング」したにもかかわらず、「非公式」なトラッキングが生まれてしまう状況を指摘した3つの研究を検討する。

まずルーカスとベレンズ（Lucas and Berends 2002）は、「事実上のトラッキング（De facto tracking）」は「法律上のトラッキング（De jure tracking）」と区別され、中等学校の議論を呼ぶ側面であるとした。トラッキングの定義に関しては対極的な2つの見方がある。一つはカリキュラムの差別化をトラッキングとみなすものである。もう一つはカリキュラムの差別化をトラッキングとみなさず、生徒が取る教科のコースのレベル間に関連がある場合にトラッキングは存在するという考え方である。1960年代半ば以前は高校レベルでは包括的なプログラムが存在しており、高校に入るとすぐに3～4年間のコース選択を決定する相互排他的なプログラムの一つに生徒たちは割り当てられた。しかしながら1960年代の終わりから1970

年代の初めになると、この伝統的なトラッキングのシステムに劇的な変化があったという。この時期に多くの都市部の学校制度が、相互排他的ですべてを決定してしまう包括的なプログラムに生徒を配置することをやめた。その代わりに生徒は様々な教科のコースに登録し、コースは垂直的に差別化されたとする。つまり「法律上のトラッキング（De jure tracking）」が廃止された後も、「事実上のトラッキング（De facto tracking）」は存続し続けているのである。

次にルービン（Rubin 2003）は、教室での長期間の詳細なエスノグラフィーによって、教師による「脱トラッキング」の「公式の（official）」実践と、生徒たちの「非公式の（unofficial）」社会との衝突に注目した。ルービンによれば、「脱トラッキング（detracking）」とは「生徒を学力的・人種的に混合した教室へと意識的に組織すること」（Rubin 2003, p.540）である。当時のトラッキングに関する研究は「能力別学級編成（ability grouping）」と呼ばれる固定的でないトラッキングの形がアメリカの学校で目立ってきていることを示していた。能力別学級編成では個人がコースごとに補習コースから上級コースまでを登録することができる。このような見かけ上の大きな流動性にもかかわらず、人種や階級に結びついたグループ分けのパターンは続いた。こうして研究者や教育者などはトラッキングを学校内で不平等を再生産するメカニズムとして疑問視し続けてきた。「脱トラッキング」はトラッキングの結果である不平等を解決するものとして支持され当時から多くの学校で試みられていた。しかしルービンは先行研究から、多様な学校の文脈において「脱トラッキング」の実施には困難を伴うとしている。

ルービン自身も人種的・社会経済的に多様な、都市部の大規模高校でケース・スタディを行い、「脱トラッキング」の難しさを指摘した。調査は「脱トラッキング」に熱心に取り組む２人の教師と５人の生徒に注目し、授業観察やインタビューを行った。さらに教室では、「脱トラッキング」の２つの目標である「人種的・階級的統合」と「教育的平等」とを達成するために最適な手段とされる、「グループ学習」に注目した。「脱トラッキング」された教室でのグループ分けでは、人種的・学力的に「混合」したグループを作ろうとする「進歩的」な教師の努力にもかかわらず、高学力の白人生徒が低学力の黒人生徒と同じグループになるのを避け、黒人生徒が孤立し落ち着いて学習に取り組めない様子が観察された。これは、学校全体の社会的・人種的状況を教室内の小グループに持ち込んだだけであり、学校内にもう一つの学校を作るようなものである。「トラッキング」と「脱トラッキング」の関係は、車の「前進」と「バック」の関係ではない。「脱トラッキング」の取り組みだけでは不十分なのである。「脱トラッキング」を効果的にするためには、生徒が安心して協力できる環境を確保することが重要だとルービンは指摘している。

最後にヘック他（Heck, Price, and Thomas 2004）によれば、1960年から70年代にかけて裁判所は、アメリカの高校において生徒を異なるコースに固定する「公式の（formal）」トラッキングを廃止するよう促してきた。しかしながら「公式の」トラッキングシステムを終わらせようとする努力にもかかわらず、様々な種類の「非公式の（informal）」トラッキングがしばしば残存しており、行政責任者が「トラッキングが廃止された」と考えている学校においてさえもトラッキングは残っていた。生徒を分化させる「公式の」構造としてトラックを見るのではなく、生徒がコースと出合った結果、コース内の集団によって定義づけられる社会的地位を反映するような「現れ出てくる（emergent）」構造としてトラックは概念化されるという。ヘックらは、コース選択とトラックの関係は質的に多様であり、トラックを生徒が割り当てられる静的で型にはまった地位としてではなく、生徒のコース選択のパターンから生じる社会的な地位として再概念化することを提案している。

さらにヘックらの研究を本稿の関心である、生徒の科目選択と進路選択という観点から検討してみたい。ヘックらは、生徒の多様な進路に合わせた多様なカリキュラムを提供し、人種的に多様で、「公式の」トラッキングを行っていない、ハワイの都市部に位置する大規模な総合制高校においてケース・スタディを行った。９年生全体の402人を調査対象としたが、12年生まで最終的に残ったサンプルは274人であった。生徒の成績証明書やカリキュラムなどのデータをネットワーク分析の手法で分析している。分析の結果、７つのカリキュラム構造（プロフィール１～７）が析出された。生徒の選択科目と進路希望の関係に注目すると、学力的に最も高い「プロフィール２」の生徒は、主に数学や理科の最上級のコースを選択しており、96％が４年制大学への進学を希望している。それに対して、学力が最も低い「プロフィール１」の生徒は、主に基礎的な数学や英語のコースに加え「校外での代替学習」や「食品サービス」のプログラムを選択し

ており、84%がコミュニティー・カレッジへの進学を希望していた。さらに、このようなカリキュラム構造の違いは生徒の人種的背景と深く結びついていた。例えば日本人の生徒は高学力のグループ（プロフィール2と4）に、一方ハワイ人の生徒は低学力のグループ（プロフィール1と7）に多かったのだ。低学力のグループに所属することは、高等教育へ進学し4年制大学を卒業する可能性を減少させることにつながる。これは学校のカリキュラム構造が周辺のコミュニティーの文化資本を再生産している傾向を示唆している。最後にこれらのことから、初期のトラッキングについての研究がマイノリティーや貧しい家庭の生徒が低トラッキングに多く割り当てられていることを示したが、ヘックらは自分たちの研究もほぼ同じような結果を示したとしている。

以上で見たように、「脱トラッキング」に関する3つの研究に共通するのは、アメリカの学校において「公式の」トラッキングが廃止された後も「非公式の」トラッキングが残存し続けている事実を指摘している点である。特に、ルービンらのケース・スタディでは、「脱トラッキング」されたはずの教室内において、グループ学習の際に生徒の人種的背景が影響し、教師が意図した「混合」グループが機能しなかったことが示された。また、ヘックらのケース・スタディは、「公式の」トラッキングを行っていないはずのハワイの総合制高校において、生徒の選択科目と卒業後の進路希望が密接に関係し、さらにそれらが生徒の人種的背景と深く結びついていたことを示した。

おわりに

本稿では、第1節でアメリカにおいてトラッキングがどのような視点で研究されてきたかを確認した。アメリカにおけるトラッキング研究の歴史は古く、初期にはトラッキングの基準や影響に注目していたが、徐々にトラッキングが形成される過程そのものに研究の視点が移行してきたことを見た。続く第2節ではトラッキングに関する政策的論争を取り上げ、トラッキングを維持しようという意見にも、あるいは逆に廃止しようという意見にも、どちらにも十分な理論的・経験的根拠がなく結論がまだ出されていないことを確認した。そして最後に第3節では「脱トラッキング」に関する研究を取り上げた。「脱トラッキング」の改革が様々な要因から成功しておらず、制度上はトラッキングを廃止したとしても事実上は多くの学校でトラッキングが存続していることが示された。

第2節で見たように、スレイビン（Slavin 1995）によれば、「脱トラッキング」が実際に上手くいくかどうかに関する答えはまだ出ていないという。アメリカではトラッキングは人種などと結びつき「不平等」の観点から問題とされてきており、そのような学校内での「不平等」を是正するような方向で「脱トラッキング」に向けての取り組みと研究が行われているようである。しかし、現実的には第3節でルービン（Rubin 2003）らが指摘していたように、「公式の」トラッキングを廃止したとしても、アメリカ社会と学校に深く根付いたトラッキングという慣習は今でも形を変えて「非公式の」トラッキングとして残存している場合が多いようである。アメリカの学校現場における「理想」と「現実」の妥協の結果が、「非公式の」トラッキングという形になって現れているのだろう。

日本の多くの総合学科高校の現状は、第3節でヘック他（Heck, Price, and Thomas 2004）が示したハワイの総合制高校（comprehensive high school）とほぼ同じような状況である。つまり公式的には「まず生徒を幅広いアカデミックなカテゴリーに置き、その後コースの配置を決める」（Heck, Price, and Thomas 2004, p. 330）制度を採用している。しかしこのように「公式の」トラッキングを行っていないにもかかわらず、現実には総合学科には2種類の「非公式」のトラッキングの分化があり、その2つの基準が別の方向性を持っていることが、総合学科における進路選択や進路指導を困難にさせていると考えられる。一つは普通科と同じような大学短大進学・専門学校進学・就職など高校卒業後の進路を基準にしたものであり、これはソレンセン（Sorensen 1970）の言う「垂直的な分化」と考えられる。もう一つは「系列」と呼ばれる、生徒が選択した科目・カリキュラムを基準にしたものであり、これはソレンセンの「水平的な分化」であろう。この2種類のトラッキングの分化に加え、本稿で見たアメリカの「脱トラッキング」の状況に見られるような、生徒の「選択の自由」という理想と、学校の「運営上の理由」という現実が複雑に絡み合っているところに、日本の総合学科高校の進路選択の困難さがあると考えられる。

さらに近年、総合学科は「普通科有利の現行入試のもとでは進学希望の生徒に敬遠されがちなため、進学へシフトしたカリキュラムの組み換えを余儀なくされ、学科の特色をなくしてしまうケースが少なくない」(日本教職員組合編　2008，56頁）という。日本において、アメリカの「脱トラッキング（detracking）」の動きとは逆方向の「再トラック化（retracking）」とでも呼ぶべき現象が起こっているのか。あるいは総合学科が普通科と同じようなカリキュラム構造を持つようになっているのか。日本の実態を検証するために参考になるのが、ローゼンバウム（Rosenbaum 1976）が提唱する「草の根研究（Grass-Roots Research）」という方法論である。「草の根研究」とは「教育的選別に関心のある者が、自分の学校でどのように選別が機能しているのかを自分で調査する」（Rosenbaum 1976, p.17）ケース・スタディのことであり、日本においても高等学校の「学校内格差」を検証する際に有効な手段となりうると考えられる。

本稿で紹介したアメリカのトラッキングと「脱トラッキング」に関する研究は、膨大な研究の中から筆者の関心に従って選んだほんの一部に過ぎず、必ずしもアメリカのトラッキング研究の全貌を描いたものとは言えない。今後は初期のトラッキングに関する文献や、近年の「脱トラッキング」の研究についてさらに分析を進める必要がある。また本稿で確認した内容は、アメリカの研究論文の中に描かれたトラッキングあるいは「脱トラッキング」の姿である。文献研究だけではなく、アメリカのトラッキングや「脱トラッキング」が実際にどのくらいの範囲でどのような方法で実施されているのか実態を把握する努力も必要であろう。さらにアメリカだけではなく、イギリスのコンプリヘンシブ・スクール（総合制中等学校）においてもストリーミングやセッティングと呼ばれる能力別学級編成が導入されている。本稿で取り上げることはできなかったが、イギリスにおけるトラッキング研究を検討することも日本の中等教育のあり方を考える際に参考となるであろう。

〈引用・参考文献〉

荒牧草平　2003　「現代都市高校におけるカリキュラム・トラッキング」『教育社会学研究』第73集，25－42頁.

Brewer, Dominic J. , Daniel I. Rees, and Laura M. Argys 1995 "Detracking America's Schools : The Reform Without Cost?", Phi Delta Kappan, Vol.77, No.3, pp.210-215.

Brewer, Dominic J. , Daniel I. Rees, and Laura M. Argys 1996 "The Reform Without Cost? : A Reply to Our Critics", Phi Delta Kappan, Vol.77, No.6, pp.442-444.

Carbonaro, William 2005 "Tracking, Students' Effort, and Academic Achievement", Sociology of Education, Vol.78, pp.27-49.

Cicourel, Aaron. V. and John I. Kitsuse 1963 The Educational Decision-Makers. Bobbs-Merrill. ,（＝1985　山村賢明・瀬戸知也訳『だれが進学を決定するか』金子書房）.

Coleman, James et al. 1966 Equality of Educational Opportunity. U.S. Government Printing Office.

Finly, Marrilee K. 1984 "Teachers and Tracking in a Comprehensive High School", Sociology of Education, Vol.57, pp.233-243.

藤田英典　1980　「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣，105－129頁.

Gallagher, James J. 1995 "Comments on 'The Reform Without Cost?'", Phi Delta Kappan, Vol.77, No.3, pp.216-217.

Gamoran, Adam 1989 "Measuring Curriculum Differentiation", American Journal of Education, Vol.97, No.2, pp.129-143.

Hallinan, Maureen T. 1994a "Tracking : From Theory to Practice", Sociology of Education, Vol.67, No.2, pp.79-84.

Hallinan, Maureen T. 1994b "Further Thought on Tracking", Sociology of Education, Vol.67, No.2, pp.89-91.

Heck, Ronald H. , Carol L. Price, and Scott L. Thomas 2004 "Tracks as Emergent Structures : A Network Analysis of Student Differentiation in a High School", American Journal of Education, Vol.110, pp.321-353.

岩木秀夫・耳塚寛明編　1983　『現代のエスプリ195　高校生—学校格差の中で』至文堂.

Jaeger, Richard M. and John A. Hattie 1995 "Detracking America's Schools : Should We Really Care?", Phi Delta Kappan, Vol.77, No.3, pp.218-219.

Jencks, Christopher et al. 1972 Inequality : A Reassessment of the Effect of Family and Schooling in America. Basic.

菊地栄治 1986 「中等教育における『トラッキング』と生徒の分化過程—理論的検討と事例研究の展開」『教育社会学研究』第41集，136－150頁.

Lucas, Samuel R. and Mark Berends 2002 "Sociodemographic Diversity, Correlated Achievement, and De Facto Tracking", Sociology of Education, Vol.75, pp.328-348.

三家その 1997 「米国におけるトラッキング研究の展開—1980年代後半以降を中心に—」京都大学教育学部教育社会学・生涯学習計画・社会教育・図書館学研究室『教育・社会・文化』第4号，113－123頁.

National Center for Education Statistics (NCES) 1994 E. D. TAB: Curricular Differentiation in Public High Schools. U.S. Department of Education.

日本教職員組合編 2008 高校カリキュラム改革研究委員会 中間報告書『競争から関係へ—社会をつくりかえる主権者教育—』.

Oakes, Jeannie 1994a "More than Misapplied Technology: A Normative and Political Response to Hallinan on Tracking", Sociology of Education, Vol.67, No.2, pp.84-89.

Oakes, Jeannie 1994b "One More Thought", Sociology of Education, Vol.67, No.2, p.91.

Oakes, Jaennie, Amy Stuart Wells, Makeba Jones, and Amanda Datnow 1997 "Detracking: The Social Construction of Ability, Cultural Politics, and Resistance to Reform", Teachers College Record, Vol.98, No.3, pp.482-510.

Rosenbaum, James E. 1976 Making Inequality. John Wiley & Sons, Inc.

Rosenbaum, James E. 1996 "Policy Use of Research on the High School-to-work Transition", Sociology of Education, Extra Issue, pp.102-122.

Rubin, Beth C. 2003 "Unpacking Detracking: When Progressive Pedagogy Meets Students' Social Worlds", American Educational Research Journal, Vol.40, No.2, pp.539-573.

Slavin, Robert E. 1990 "Achieving Effects of Ability Grouping in Secondary Schools: A Best-Evidence Synthesis", Review of Educational Research, Vol.60, pp.471-499.

Slavin, Robert E. 1995 "Detracking and Its Detractors: Flawed Evidence, Flawed Values", Phi Delta Kappan, Vol.77, No.3, pp.220-221.

Smith-Maddox, Renee and Anne Wheelock 1995 "Untracking and Students' Futures: Closing the Gap Between Aspirations and Expectations", Phi Delta Kappan, Vol.77, No.3, pp.222-228.

Sorensen, Aage 1970 "Organizational Differentiation of Students and Educational Opportunity", Sociology of Education, Vol.43, pp.355-376.

Sorensen, Aage 1978, "The structure of Inequality and the Process of Attainment", American Sociological Review, Vol.42, pp.965-978.

Spade, Joan Z., Lynn Columba, and Beth E. Vanfossen 1997 "Tracking in Mathematics and Science: Courses and Course-Selection Procedures", Sociology of Education, Vol.70, pp.108-127.

Wells, Amy Stuart and Jeannie Oakes 1996 "Potential Pitfalls of Systematic Reform: Early Lessons from Research on Detracking", Sociology of Education, Extra Issue, pp.135-143.

Wells, Amy Stuart and Irene Serna 1996 "The Politics of Culture: Understanding Local Political Resistance to Detracking in Racially Mixed Schools", Harvard Educational Review, Vol.66, No.1, pp.93-118.

Welner, Kevin G. and Jeannie Oakes1996 "(Li) Ability Grouping: The New Susceptibility of School Tracking System to Legal Challenges", Harvard Educational Review, Vol.66, No.3, pp.451-470.

Yonezawa, Suzan, Amy Stuart Wells, and Irene Serna 2002 "Choosing Tracks:" Freedom of Choice "in Detracking Schools", American Educational Research Journal, Vol.39, No.1, pp.37-67.

A Review of Studies on "Detracking" in the United States —Focusing on Policy Debates and Studies from the Late 1990s—

KONISHI Naoyuki

This paper examines the previous studies on "detracking" in the United States, that focus on how subject and course choices are made by the students in schools where traditional tracking has been abolished. One of the purposes of this paper is to utilize this information in the context of the course choices of the Japanese high school students. Using the findings of these studies, I compare the situation of comprehensive high schools in the United States with the Japanese "Sogo Gakka" senior high schools. I provide short summaries of the studies regarding the American tracking system. Furthermore, by introducing policy debates about detracking, I show that there is a dearth of evidence to enable a choice between the maintenance and the elimination of tracking. By considering previous studies on detracking, I demonstrate that "unofficial" tracking continues to exist in schools that should have abolished "official" tracking and that "unofficial" tracking affects students'subject and course choices. Finally, the result of the analysis on the situation in American high schools provides us with information that will assist in the study of the course choice in the Japanese "Sogo Gakka" senior high schools.